

ホリスティックライフってなんだろう？

～ヒッピームーヴメントから読み解く ホリスティックな生き方と暮らし～

【ホリスティックライフスタイル ネットワーク企画】

2012年3月18日 於：総評会館

1. 講演：「ヒッピームーヴメントについて」上野圭一
2. 映画上映：『スワノセ第四世界』
3. パネルトーク

上野圭一（当協会副会長）

辻信一（ナマケモノ倶楽部世話人／明治学院大学教授）

安珠（Earth Spiral／パーマカルチャーハーバリスト）



はじめに

「自分をヒッピーと思っている人はいない」というところから、上野氏の講演が始まりました。ヒッピーとはマスコミがつけた蔑称。彼らは消費にとりつかれた親の暮らしぶりを見て嫌気が差し、自然と共生する先住民（ネイティブアメリカン）の暮らしに倣おうとした中産階級の白人達でした。Hip とは「もののわかった」という意味。そして Hippie とはヒップちゃんたち、もののわかったお嬢ちゃんたちということ。上野氏の 70 年代のパークレーでの話など伺った後、1976 年に製作された上野氏監督のドキュメンタリー映画『スワノセ第四世界』を見ました。より少ない資源で豊かな生活を送ろうと諏訪之瀬島に都会から移り住んだ、詩人のナナオサカキをはじめとする芸術家達や火山学者たちの暮らしぶりが描かれています。大自然の神々が宿る火山の島・諏訪之瀬の自然と村人と移住者達の調和し

た暮らしの中に、ある日、招かれざる訪問者がやってきて、都会人の遊技場・リゾートを作ろうとします。「これは諏訪之瀬だけの問題ではなく、世界の焦点である」とその開発から諏訪之瀬島を守るために、アメリカの詩人・自然保護活動家のゲイリー・シュナイダー達がやってきます。

東京電力福島第一原発の位置する福島県より参加した私にとっては、同じように去年の3月の起きたことは「福島だけの問題ではなく、世界の焦点だ」という想いと重なりました。後半のパネルトークの打ち合わせでは、311のことは触れる時間がないのでは？という私の懸念に対し、上野氏、辻氏とも、「311から1年経ったこの時に、ここに集まってホリスティックライフについて考えるんだ、ということに参加者とは共有してトークを始めよう」とおっしゃいました。そのことを会場の皆さんに伝えてのパネルトークのスタートとなりました。

スワノセ第四世界・預言者たちの言葉

安珠: 私は生まれたのがヒッピームーヴメントたけなわの 1960 年代なので、リアルタイムの体験はないのですが「ウッドストック」「ホリスティック医学」「エサレン研究所」などを知り、60 年代をエネルギーギッシュで憧れの時代という意識で見っていました。辻さん、上野さんはヒッピームーヴメントとはどんなもので、311 を経てそれがどういう意味を持つてくると思われますか？

辻さん: 僕はヒッピーより後の世代で、黒人やインディアンに関心があったので、ヒッピーという白人のものには違和感を持っていました。21 世紀終わりから明らかに大きな変化が起きつつあると感じます。それは、当時ヒッピームーヴメントや黒人運動などの形でバラバラに存在していた様々な覚醒が、ホリスティックにいろんな側面が一緒になり、いよいよ一つの文明の終わりとして新しい時代の始まりとして、2000 年を境にして実感できるようになってきた。911 も衝撃的だったけれど、311 も僕の人生の中で本当に大きな事件。覚醒の時を告げる、警告でもあり、大きな機会の到来という感じもしています。そういう意味で『スワノセ第四世界』に忘れかけてるキーワードがたくさんあった。ナナオもゲイリーも預言者みたいに思えるね。

上野さん: 今振り返ると、ちょうどこの映画が出来た頃に福島第一原発が出来ているんですよ。アメリカはもっと先行し既に始めていた。それに対しゲイリーは「うまくいかないからやめておいたほうが良い」と言った。彼は石油依存、原子力依存に対して批判的な立場にあった。311 以降言われている事の大半は、スワノセに出てくる人達が既に 40 年前

に気づいてた事。しかし、この声が届かないまま、ずるずると今まで来てしまった。

ヒッピー文化の遺産を受け継ぐ カルチャークリエイティブ

安珠: ホリスティックライフスタイルをめざす時、ヒッピー達から学べることは何でしょうか？ その前にホリスティックライフスタイルって何なのか？を考えないといけないかな。

上野さん: 僕自身は大いにヒッピー達から学びました。彼らは先住民的な持続的な生活を真似ようとしていた。日本にもアイヌなど先住の民がいたし、まだいる。まずは、足元にある縄文以来続いているライフスタイルを教科書にすること。この前、テレビで九州で焼き畑農業をだた一人継承しているおばあちゃんの映像を見て驚いた。持続的な生活の本当に深い知恵を実践している。そういう人が現存しているから、そこから学ばない手はない。

安珠: ヒッピー達が先住民をリスペクトしていたのは、自然の中で長く生きてきた人たちが集積してきた知恵に基づく生き方に対してなんでしょうね。辻さんから見て先住民の暮らしのエッセンスというのは、何だと思われますか？

辻さん: 先住民の知恵とは、バラバラにしないで丸ごと捉えているという思考。「バラバラではない」と「ホリスティック」は違う。近代にバラバラな思考、分断する思考に移行して、それが実際に様々な効果を発揮している。それを経て総合するというか、もう一度ホリスティックという事を、意識的に選び取る時代が来ているのではと思います。そして、

60年代のムーブメントは反対運動ではなく、新しい文化をつくるという意識が生まれた先駆けで、その一部分がヒッピーなのだと思う。『カルチャークリエイティブ』という本が2000年に現れますが、この言葉が実は「LOHAS(Lifestyle Of Health And Sustainability)」という流行った言葉の原型です。カルチャークリエイティブは「文化を創造する人達」ということ。アメリカではヒッピーなど、カウンターカルチャーの流れが1%~2%程度で、当時は、統計上無視していい数だった。それを追跡すると、2000年までに3分の1くらいがカルチャークリエイティブだとうことが解った。主流社会と全然違う価値観をもつ人たちがそれだけいる。これは凄いことです。それは、60年代から引き継がれてきたエコロジカルでホリスティックな身体論・健康観・世界観なのです。

上野さん： Health にせよ Sustainability にせよ、カウンターカルチャーの産物だと思います。現象としてのヒッピーはエネルギーが低下したけれど、文化的な遺産はきっちり受け継いでいて、市民階級の中には広がっている。

辻さん： 例えば、安珠さんがされていることも、まさにそういう流れにあるのだと思います。僕は日本に帰国してから、学生達を20年見ているのですが、特にここ10年は若者が違う。非常にカルチャークリエイティブ的な部分が拡張している。同時に、いろんな問題を抱え込んでいる世代。いわば崩壊しつつある文明の病を背負い込まされ、311で放射能汚染まで背負い込まされた犠牲者。彼らの未来は大変だからこそ、今までのシステムからかなり距離を置いて、違う方向を向いている人達がたくさんいる。大人達が「最近の若者は…」と言うのを聞くと、何

をこの人達は見てるんだと思う。ほんとにあきれますね。まさに鈍感でダメなのは、僕らの世代、あるいは僕らより上の世代なのに。

安珠： 震災後、福島から新しく文化を発信しようというプロジェクトを始めた方々がいて、まさに今それが必要だなと思っていました。スワノセに出てくる人たちもクリエイティブですね。土や水や太陽の光という自然の恵みから暮らしを創ることは、とてもクリエイティブです。そして、問題が大きいからこそ、そこで創造力が発揮される、という可能性が人間にはあるのではと、今だからこそ感じます。若い人の中に、そういう人がたくさんいるというのが、嬉しい話だと思います。

自分達で文化を創らなければいけない 稀有な時代

辻さん： 文化は本質的に、ホリスティックなもの。それが文明の名の下に非常に貧しくされてきた。諏訪之瀬島の実験は世界中にあり、もう一度、自分で住むところや食べるものを作ろうという実験だった。映画に火山学者が出てきましたが、科学も文化の一部だということを思いださせてくれた。原発の科学者と好対照ですよ。彼は詩人でもあり、暮らしながら科学している。当たり前のプロセスをもう一度やってみようとして試みている。ポスト311時代に僕たちが、もう一度すべきは、そのことなんじゃないのかな。

世界の歴史を振り返ってみると、ほんとに不思議な時代にいる。かつて、生まれた時代の文化があまりにも貧困なので、文化を創り出さなければいけない役割を負わされる人なんていなかったと思うんです。人間は文化の中に生まれ、その文化を

黙々と継承すればよかった。ところが、お金を最大の価値にして、すべての世界がそれに奉仕するという、完全に逆転した仕組みの中で、文化は砂漠化してしまっただ。ナオオのところに学生達を連れて行くと、「さ、じゃ、君歌ってみてくれ」と言われ、皆が引くと「え？いつも歌ってないのか？そんなの人生っていえるのか」といって自分が歌うんです(笑)。一昔前、日本人はよく踊り、歌も上手かった。僕らはそれをみんな手放してしまっただ。お金はあるても文化的に貧しくなっただ。

安珠: 私の住んでるところは、お祭りがいっぱいあるんです。そうすると、普通のおじさんが太鼓やったり笛を吹いたり、おばちゃんが歌ったり。なんか凄いなと思った。普段は仕事したり畑したり普通の暮らしをして、祭りの時は芸を披露する。バリ島の人達みたいと思った。

辻さん: 地方に行けば、ドキっとするようなものが、まだ残っている。しかし、この何十年、それは全く評価されてこなかった。僕らが都会から行くと、「ここは何にもない」ってみんな言っただよ。

安珠: うちの地元の人もそう言います。実は豊かな文化がそこにあるのに。

オタク化してはいけない

安珠: 諏訪之瀬島の人たちの暮らしは、「自然との共生」「人と人の繋がり」、自然界や周りの人々への「感謝や祈り」ということが見られると思うのですが、辻さんが親交のあるサティッシュ・クマールさんが言う「soul」「soil」「society」と重なるところがあると思うのです。その辺りはどうですか？

辻さん: ホリスティックは何かと云ったら、彼の言うその三つの「S」だという風に言えいいと思うんです。彼がどういふ文脈で言っているかという、ともすると、環境運動家達は「soil! soil!」と言う。「空気をきれいに! 水をきれいに!」と盛んに言う。スピリチュアル系の人たちは心のケアが最優先(「soul! soul!」)。ところが自分さえケアしていれば、環境にも社会運動にも興味がない。環境運動の人たちは「スピ系だから」とか云って彼らを敬遠する。社会運動家は人権とか貧困とか差別の問題とかに対して戦っている(「society! society!」)。しかし、その人達も環境のことに全く関心がない人がかなりいるんです。そして、スピリチュアル系に対しては「自分勝手にけしからん!」と言う。僕達はそういう風にどこかで割れてるんじゃないかな。運動家だけではなく、僕たちは世界をバラバラにして生きているのでは。その3つが新しい三位一体です。ニューエイジの三位一体「body, mind, spirit」と云ったら、まだ自分のことばかりですね(笑)。で、先ほどのこの会の趣旨の中で「社会や自然界をこんなにぶち壊して汚して、そんなところで健康であるわけがない」とありましたが、全くその通りだと思う。この3つが実は一体だという感覚を取り戻すのが、ホリスティックということじゃないのかな。そういえば、僕、上野さんと対談本と一緒にさせていただいたけど、健康のことほとんど出てこなかったですよ。上野圭一さん、結構不健康な人だし(会場笑い)。

安珠: さっき、あそこでタバコ吸っただから。ばらしちゃった。

辻さん: 上野さん、あんまり健康に関心ないんじゃないですか？

上野さん：あはは。

辻さん：関心がないのに、何でここに座ってるんですか？

上野さん：それは、関心のないという状態が楽なんです。それについて考えることがない状態。その領域を広げてるんです。どんどん。あはは（会場笑い）

辻：関心があるというのは、囚われるということでもあります。オタクって言葉あるでしょ。

上野さん：オタクが一番苦手です。

辻さん：今の教育は「オタク化しなさい」といって、るようなもの。専門バカばかりになってる。オタク社会の行き着くところが原発であったり原子力ムラだと思えますね。

ホリスティックに至る道は 足し算ではない

安珠：『スローメディシン』にある「本来の医療は自然治癒力を補うものである」という言葉に共感しました。

上野さん：自然治癒力は本来的に与えられている命の特性だと思うんです。命が与えられているということは、自然治癒力が与えられているということとほぼ同義語と考えていい。ただ、状況によってその与えられた治癒力が弱まったりすることがある。その時に手助けが要る人もいれば、回復する知恵を持っている人もいる。特別なことでは全然ない。た

だ、自然治癒力は目に見えにくい。でも本来的には既に与えられている。だから、お任せするのが一番いい。お任せできなくなったから、人間の浅知恵で介入するようになった。医学が生まれたこと自体がそういうことだと思うんです。病気が治るといふ現象を、よくよく見ているうちに「本当にそういう力があるんだ、実在するんだ」という確信を持てるようになってくると思うんです。そして、そういう強い信念を持つことが、眠っていた、あるいは、衰えていた治癒系のスイッチを入れる有力な手がかりになると思うんです。意識の表層レベルではなく、深く、はらわたで解らないといけない。

辻さん：ホリスティックに至る道筋を、多くの人は、まだ足し算で考えてる。ホリスティックというのは全体だから、足りないものを足していけば全体になると、思っている人がいるんじゃないかと思う。それは大きな間違いだと思う。世の中のほとんどすべての問題は、足し算の結果なんですね。足し算や掛け算。どんどんどんどん増やしてきた結果で、今の現代社会の本質は「過剰」です。じゃあ、どうしたらいいの？ 過剰の解決方法は足し算じゃない、引き算しかない。どんどんどんどん引き算していく。そうするとホリスティックが見えてくる。引き算すると自分の中にあるホリスティック性がね。さっきの自然治癒力っていうのは、ホリスティック性だと思うんです。引き算しなかったら自然治癒力なんか絶対発揮されない。

我々は、死を取り戻さなければ ならない

安珠：ホリスティックはバラバラを足し合わせるだけではないという、考えるヒントをいただけたかと

思います。それを次回以降、深めるテーマとして置いておきつつ、そろそろ会場の方から質問を。

参加者の質問：今日話しに出てきたティモシー・リアリーやラムダスがホスピスなどで『チベット死者の書』を応用してる話を思い出しました。それはある意味、今、分断されている生と死を繋げてホリスティックにするアプローチなのかと思うのですが、どうでしょう？

上野さん：本来の『チベット死者の書』は枕経で、死に行く人々に耳元でこれからこういう体験をするから怖がるなという、一種のガイドを僧侶が唱えるもの。それをサイケデリックなドラッグを服用しながら、疑似体験するのが T・リアリーのやり方なので、違いがある。一番肝心の「生と死の繋がりがホリスティックの根幹である」というあなたの認識は僕も賛成です。死を視野に入れずにホリスティックな生だけは謳えない。

辻さん：311 の後よく思うのが、あの原発事故みたいなものを引き起こしたのは「僕たちがいつまでも死なないうつもりになっている」ということが引き起こしたのではないかと思う。それを思ったきっかけが、東電の社長辞任の時。5億円の退職金が批判された時、「やっぱり老後のこともありますから受けとる」って…。後 100 年ぐらい生きるのかと思った。つまり死ぬ気がないってことなんですね。原発も夢のリサイクルとって、永久に続くと思ってる。何でそんなことを思うかという、永久に続く経済成長を考えているからでしょ。今まで存在した文明は滅びてきているのに、誰もこの文明だけは滅びるなんて思っていない。だから、本当に死を取り戻す必要があると思うのです。

パネルトークを終えて

ヒッピーとホリスティックライフ、そして健康の話、どう繋がるのかハラハラドキドキでしたが、本質に迫るお二人の話は圧巻でした。「ホリスティック性」と「死」の話から、私は 311 の原発事故により、自分の中の何かが「死」を迎えたのだと気づきました。それはある意味、強制的に引き算されてしまった状態です。それが実は、自分のホリスティック性が現れる条件が整った瞬間なのかもしれないと思いました。この 1 年、前に進みたい焦りや、判断を急ぐ気持ちが出てきましたが、「すること」ではなく「しないこと」により、自分の「再生」を見守りたいと思いました。そして、カオスポイントを超えたホロス時代への転換は、「する事」を変えるのではなく「在り方」を変える事なのではと思える示唆をいただいた気がします。

報告：安珠



スローメディスン

まるまる治る、ホリスティック健康論
(ゆっくりノートブック)
上野圭一(著)、辻信一(著)
大月書店(2009)
¥1260 (税込)